エクトール・ビアンシオッティ　西永良成訳
『夜が昼に語ること』
発行　財団法人国際言語文化振興財団
発売　株式会社サンマーク

「今日では、私の人生のほうが私をさがしている」との書出しから、このテクストは始められる。そしてこの導入部にいざなわれるようにして、作者は自己のたどってきた軌跡をひそやかに、クロード・シャブロルの無表情な映像がなめらかにつなぎ合わされるのとおなじように、たどりかえしてゆく。たとえば物語が始まるとすぐ、かれは妹の誕生という忘れがたい出来事に遭遇することになる。六歳だった主人公はその「ぽってりと甘美な」異性の幼いからだにつよく惹かれ、触れてみると幸福な気持ちをおぼえる。そして「その他のすべての午後を消し去ってしまう」変容をもたらすある午後、「噛みつきたいという、やむにやまれぬ欲求に捉えられ、鼻や脚をくすぐりながら軽く彼女の腿を噛んでみた。そうとは知らず、彼女の快感の急所をさがしていたのだ。私はある種の震えや途切れ途切れのおしゃべり、または別の、なにか近くにあるものを見ているような眼差しからでさえも、その急所をさがし当てられたと思う。そして、まだ想像力が感覚に影響をあたえない年齢でもう、抱擁がけっして充分に密接なものに、力が充分に神経を張りつめたものにならないことを、そして他者のなかに入り込み、そこに溶け込み消え去ろうとする者の絶望を知ったのだった」。

強いセクシュアリティの噴出が映し出される描写には、しかしある種の切迫した欲望や衝動というよりも、それらが典雅に編成された言語へのゆるぎない信念がまさっており、それがこの作者のエクリチュールを輪郭づけているように感じられる。実はこれこそがビアンシオッティという作家にとって、誰しもが磨きぬかれたと感嘆する他はない文体の核心に位置づけるべきものである。そこでは語られる経験や出来事はまさに欲望と言語の境界を出はいりしながら、結局は言語の誘惑のほうへ吸いよせられ、その事実によって語られる記憶は紡ぎだされる文体のなかで終わりなく「私をさがしている」。では「私」とはいわゆるアイデンティティなのか、それとも主体と呼ばれる「私」を構成する複雑な力の総和であるのか。テクストはこの主題をめぐって旋回しつつ、一方でその記述の仕方はあまりにも確信にみたされ、とらえようのない陶酔感におおわれている。

セクシュアリティがこの小説の最大のモチーフになっていることは、大小さまざまな六十からなる断章によって構成されるテクストのどの部分から読んでみようと、容易に理解できるにちがいない。そしてここでも、作者はセクシュアリティという欲望の強度をあえて記憶の行為の側へ引きよせるのではなく、言語というきわどい表現形式に自意識的にゆだねようとする。それが最もなまなましく、かつ大胆に表出される場面はテクストの中盤でやってくる。

> 罪ある人間として生まれ、良心の咎めを重ねる生来の性癖に流されるとはいえ、私はその日も、そのあとも、過ちを犯したという感情を覚えなかった。ずっとときめきが残り、そのときめきが会うごとにますます激しくなりはしたが。世界？　やっと確かなものになった。交わした愛撫？　それがはじめての愛撫だった。唇？　それがひとつになったはじめての唇だった。ふたりが一体でしかなくなるあの充足感が無垢のなかに浸っていた。

神学校時代の同級生との恋愛を語った

この記述から、即座にホモセクシュアリティをめぐる煩瑣な文化表象を想起できる者はいないはずだ。なぜいないのかは説明できるが、問題はそこにあるのではない。幼い、というよりもセックスすら未分化な妹の肢体に吸引される少年をなぞるように、「まるであらゆる道の果てに達したかのよう」なこの経験は、はじめにセクシュアリティが経験を領有し、記憶の回路を配備してしまっていると考えられる。だが事実は逆であって、表出された言語こそがこの青年のセクシュアリティ、ホモセクシュアルとしての眼のくらむようなはじめての欲望を経験という鋳型へ融かしこんでいるのである。ちょうどそれは、「ジェンダーとはパフォーマティヴなもの」であって、「そのように語られたアイデンティティを構築していくもの」だとするバトラーの理論をあざやかに例証してみせるかのようだ。伝記文学としての『夜が昼に語ること』の新しさは、幼年期や青年期に産出されるセクシュアリティの言説を、アイデンティティという神話に基づく体制から切断した事実にある。

フランス文学は近代以降、世界文学の中心的な磁場として、ありあまる数の作家を輩出してきた。この時代にこれほどの才能と想像力を擁した国家は他にはない。しかしそれはこの地域に傑出した人材があふれていたからというわけではなく、むしろこの文学が、貪欲ともいえる知と感覚の技芸をつくして、他者の文化をのみこんできたことのそれは帰結である。モリエールのスペインやスタンダールのイタリアから、イヨネスコやベケット、さらにクンデラやクリステヴァにいたるまで、フランス文学が他者から占有し、あるいは摂取し、みずからに固有の文芸としてつくりなおした主題や才能は数かぎりない。そこにコロニアルな思考や帝国主義的な知を指摘するのは難しいことではないが、同時にそこへ、ビアンシオッティという名の、驚くべき文学的資質をそなえたイタリア系アルゼンチン人を引き寄せたこともまた事実である。故国での青年時代はもとより、渡欧後の長い時期にも一群の亡命作家のなかにくくられていたにすぎないこの才能を、アカデミー会員というまばゆい権威の座におしあげたのはフランス語とその部厚い歴史文化なのである。

ビアンシオッティは、世代としてはガルシア＝マルケスよりやや若く、『蜘蛛女のキス』の作家、マヌエル・プイグとは正確に一致する。ラテンアメリカ文学史関係の資料を調べたところでは、しかしこの作家に言及している文献はわずか一点しか見出せなかった。その書物（八五年刊）ではマイナーなアルゼンチン作家のひとりとしてとらえ、ある作品について「プルースト風の〈失われた時〉の新たなる獲得」と評していた。フランス語作家として転向するのはこの時期であるから、ラテンアメリカ文学の作家としての評価はこれで限界なのかもしれない。アルゼンチン作家であることをやめてしまったビアンシオッティ――それにしてもアルゼンチンはあのパンパのごとく寛大な国なのか、コルタサルもフランス人としてパリに眠り、ピアソラもまたパリで客死寸前のところを祖国へ連れもどされ、プイグは生涯のほとんどを国外で過し、そして今度はまた、稀有なこの才能も手放すことになって。

クンデラの熱心な紹介者でもある訳者にまた、宝石のような訳業が加わったことをひろく報告したい。

（杉浦勉）